

# 資本主義の世界史的発展段階をどうとらえるか<sup>1</sup>

小幡道昭

2015年5月30日

<sup>1</sup>世界資本主義フォーラム 於 立正大学

マルクス経済学の課題

## 歴史理論

- 資本主義の不正を暴く、といった啓蒙主義ではない。
- 啓蒙主義批判としての「唯物史観」
- イデオロギー批判としてのマルクス主義
- 資本主義自身も歴史的に「発展」する。
- 段階的発展のイメージ：構造変化
- 成熟し、やがて次の社会に移る。第1幕、2幕、3幕、そして...
- どのように....かを考える基礎としてのマルクス経済学

宇野原理論・段階論

## 純化傾向と体系的純化

経済学の原理は十七世紀以来の資本主義的商品経済の発展の過程の内に認められる、商品経済的純化の傾向に基づいて抽象されるのであって、いわゆる産業資本の時代の商品経済的諸現象をとって、その攪乱的要因を除去した、いわば**平均的なものとしての原理**をなすわけではない。もっとも産業資本の時代ならば、その商品経済的純化傾向のよって、その諸現象の、いわゆる理想的平均は、原理を、その細目においては兎も角、その大綱においては開示するものといつてよいのであるが、金融資本の時代になると、その発展は**純化の傾向**を屢々阻害されてくるのであって、そうはいかなくなる。....かくして経済学の原理は、**如何なる時代の、如何なる国の資本主義にもただちにそのままにはあらわれない純粋**の資本主義社会の経済的運動法則として展開されるのであるが、しかし如何なる時代、如何なる国の資本主義に対しても、この原理なくしては、科学的に分析し、解明しえないという、そういう基本的規定を与えるものである。それは資本主義社会の商品経済的諸現象——具体的には必ず非商品経済的要因によって、多かれ少なかれ不純化されてあらわれる諸現象——を解明する基本的概念を与えるのである。

宇野原理論・段階論

## 純化傾向論の負荷

- 純化傾向は、隠れたかたちで純粋資本主義像の負荷をかけている
- 重商主義段階と商人資本
- 自由主義段階と機械制大工業
- しかし、最大の負荷は、帝国主義と金融資本
- 原理論の無理な終結部

## 目次

- 1 マルクス経済学の課題
- 2 宇野原理論・段階論
- 3 岩田弘の世界資本主義論
- 4 ネオ純粋資本主義
- 5 変容論的アプローチ
- 6 多重起源説
- 7 多重起源説

宇野原理論・段階論

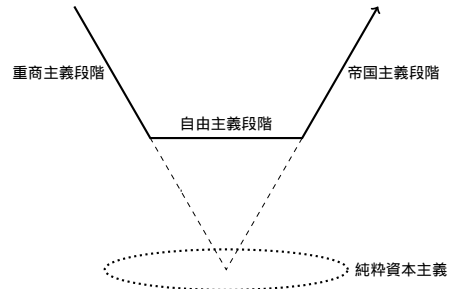
## 通俗：三層三段構造

	生成	発展	没落
支配的な産業	羊毛工業	綿工業	重工業
代表的な資本	商人資本	産業資本	金融資本
経済政策	重商主義	自由主義	帝国主義

- この三段三層の図式は、いわば舞台の書き割りのようなもので見た目は美しく整っていても、楽屋裏から覗けばその虚構性は一目瞭然。
- 宇野も、当初はこうした通俗的な段階論をめざしたわけではない。

宇野原理論・段階論

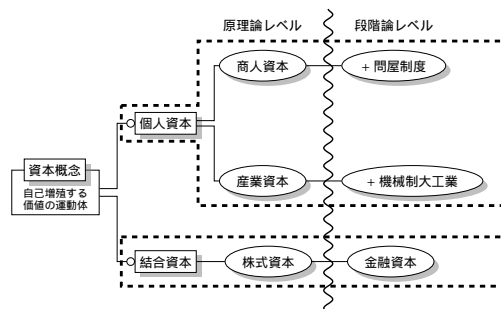
## 純化傾向と体系的純化



商品経済的純化の傾向に基づく抽象の方法  
 攪乱的要因を除去した理想的平均の方法  
 体系的純化の方法

宇野原理論・段階論

## 商人資本・産業資本・金融資本の混乱



## 帝国主義段階と原理論の紐帯

## 基本論理

- 1 「純粋な資本主義では、株式資本の存在は説明できない」
- 2 「しかるに、株式資本が広く普及した」
- 3 「ゆえに、現実の資本主義が不純化したのだ」

## 独自の資本物神論

- 1 『資本論』とは異なり商業資本の位置を信用論の後に移し、商業利潤における利子と企業利潤への分割論
- 2 「資本はそれ自身に利子を生む」という観念
- 3 擬制資本の市場は「原理論では説明できないヨリ具体的な諸関係を前提とし、展開するものとなる」

9 / 175

## 意義

宇野の「それ自身に利子を生むものとしての資本」に対する岩田弘の先駆的批判は的確なものであった。

## 基本論理

- 1 「資本主義の存続には利潤率の均等化が不可欠である」
- 2 「固定資本が巨大化すると、周期的景気循環を通じた利潤率の均等化は困難になる」
- 3 「それゆえ、現実の利潤率の不均等を均等化するために、配当を利子と見なし、利回りで均等化する擬制資本としての株式資本が必須となる」

10 / 175

## 評価

- 純粋資本主義に対置された世界資本主義の方法は、基本的にボタンを掛け違い
- 利潤率均等化の「想定」に基づく株式資本の「要請」という論理に、19世紀末の歴史的事実を写し込む（これを「内面化」とか「内的叙述」という）方向
- この内面化論はけっきょく、純粋資本主義と世界資本主義という異なる想定のもとで株式資本の成否を争うもの
- しかも、世界資本主義はその舞台設定において、歴史的事象をそのまま原理論の内部にもちこむかたちになっていた。
- 純粋資本主義論が19世紀のイギリス資本主義の現実をそのまま理論に反映させるのではなく、
- 純化傾向を延長するという「操作」を通じて「想定」を抽象化し、理論の一般性を担保しようとした
- 世界資本主義論は素朴な歴史＝論理説の旧弊に回帰する難点
- そして外的条件から距離のある理論のコア部分は、逆に純粋資本主義以上に純粋な、超純粋資本主義に骨化

11 / 175

## 意義

- 商品経済的な要因によって説明可能な原理論に再純化
- 株式資本の生成
- 「想定による要請＋歴史的事実の反映」という世界資本主義論の難点を避け、
- 同時に宇野の純化・不純化論の負荷による理論の歪みを正す意味
- 産業資本の競争のなかから第一に分化するものとして、商業資本の位置を信用機構の前に戻し、
- さらに競争の第三の補足機構として資本市場を説明する構成が定着

12 / 175

## 意義

- 宇野の純粋資本主義論も岩田の世界資本主義論も、現実には利潤率の均等化が困難になった現実を形式的に隠蔽するものとして株式資本を位置づけていた点では同じで
- ネオ純粋資本主義論は、利潤率均等化の促進機構として資本市場を位置づけた
- 純粋資本主義と異なる想定のもとで株式資本の必然性を主張するのではなく、原理論の体系的純化を徹底することで、逆に論理的発生を説明する立場が確立

13 / 175

## 限界

- 旧純粋資本主義においては、否定形を通じた屈折した関係においてであるが、原理論と段階論はしっかりと結びつけていた。
- 新純粋資本主義は、体系的純化を通じて内側から切った。
- しかし、帝国主義という段階規定、強いては発展段階論そのものも再構成にはふみきれず
- 「経済原論の完結性」におさまる
- 帝国主義段階も外的条件によるタイプの種差に力点がかれ、一つの歴史的發展段階として統一性を欠いた「類型論」に後退

14 / 175

## 萎縮の契機：たとえば

- 何がこうした萎縮をもたらしたのか。
- 直接の契機は、株式資本をあくまで利潤率の均等化を結果的に促進する「競争の補足機構」の一分枝として位置
- だが原理論の最後に、少しだけ株式資本を説くこの方法にはまだ問題
- 株式市場において自由に売買される制度的に完成した株式資本を対象にしながら、この流動化機構が商品経済的な動力だけでどこまで導出できるのか、という狭い関心
- 資本概念を、「自己増殖する価値の運動体である」というように一般的に規定をした段階で、同時に「そもそも資本とは個人資本である」という暗黙の了解が受容
- 資本の一般概念から個人資本家であるという結論がただちにでてくるわけではない。
- 個人資本が本来の資本であり、それがどうして株式資本になるのか、という問題は、貨幣は本来金属貨幣であり、それがどうして信用貨幣を派生させるのか、という問題と同型なのである。

15 / 175

## 開口部の発掘

- 1 段階論の側からみても、ここにも大きな開口部が潜んでいることが透視できる。
- 2 株式資本を原理的に導出したものもお逃れられない純化・不純化論の負荷の正体は、資本主義は完結した原理像をもつというドグマ
- 3 このドグマで封じられた開口部を発掘し、変容を生み出す分岐構造を解析することがこれからの原理論の課題
- 4 「原理論からみた段階論」にも新たな展望が開ける
- 5 開口部を具えた変容する資本主義像を解明する原理論へ

16 / 175

## 重商主義問題 資本主義の出発点

### 商業革命(1)

商品流通は資本の出発点である。商品生産、および発達した商品流通 — 商業 — は、資本が成立する歴史的諸前提をなす。世界商業は、16世紀に資本の近代的生活史を開く。(K.,I, S.161)

第4章「貨幣の資本への転化」

### 商業革命(2)

資本主義的生産の発端は、すでに14世紀および15世紀に地中海沿岸のいくつかの都市で散在的に見られるとはいえ、資本主義時代が始まるのは、ようやく16世紀からである。資本主義時代が現れるところでは、農奴制の廃止はとっくに実現されており、中世の頂点をなす自治都市の存立もずっと以前から色あせてきている。(K.,I, S.744)

第24章「いわゆる本源的蓄積」第6節「産業資本家の創世記」

## イギリスに先行する発展

### 1 イタリア都市国家

- 貿易の衰退(ポルトガルによる東方海路の開発)
- 産業の後退(イギリスの毛織物工業によるベネチア品の模造)
- 貿易から金融へ

### 2 ポルトガル・スペイン

- 南アメリカへの侵攻(ポトシ銀山1545):レコンキスタ型の植民都市建設:分権制:
- 植民colonisation (tradeではなく)という開発・人口問題
- 「価格革命」新しい資源の発見が衰退をもたらすという現象

## 暫定的結論

- 14, 5世紀に視野を広げると、グローバリゼーションのいくつかの特性が、けっして特殊、固有なものではないことがわかる。
  - 貿易から金融への後退
  - 生産過程と独立に進む金融の機構分化
  - 模倣と変容
  - 中心の移動と戦争
- 19世紀のイギリス資本主義に先行して独自の商業的な発展がみられ、今日のグローバリゼーションに通じる特性を強くもっている。それは、イギリス資本主義の形成過程としての重商主義段階という枠組ではカバーできない。

## 単一起源説

- 資本主義はイギリスで発生し、それが全世界に波及したとみる立場。
- 労働力商品化を資本主義の本質と捉え、「土地囲い込み」に重点をおく。
- 生産手段としての土地と労働力の分離 → プロレタリアートの形成が基本線。
- 工業化(産業化) industrialisation を資本主義と結びつける観点
- マンユファクチュア(「工場制手工業」) → 「機械制大工業」
- 土地囲い込み → プロレタリアート → マンユファクチュア といふかたちにはならない。
- 宇野弘蔵はマンユファクチュアの自立性を疑問視し、商人資本による「家内制手工業」の支配 → 産業資本による「機械制大工業」という発展を考えた。
- しかし、プロレタリアートの形成 → マンユファクチュアによる吸収も、ましてやプロレタリアートの形成 → 「家内制手工業」による吸収もあり得ない。
- プロレタリアートの形成 → 「機械制大工業」による吸収しかない。

## 資本の原始的蓄積

- 第1節「本源的蓄積の秘密」
- 第2節「農民からの土地の収奪」
- 第3節「15世紀末以来の被収奪者にたいする流血の立法。労賃引き下げのための諸法律」
- 第4節「資本主義的借地農場経営者の創生記」
- 第5節「工業への農業革命の反作用。産業資本のための国内市場の形成」
- 第6節「産業資本家の創生記」
- 第7節「資本主義的蓄積の歴史的傾向」

### イギリス単一起源論

重商主義段階というと普通は、ここに描かれた、イギリス資本主義の重商主義段階ということになる。一言でいえば、プロレタリアートの形成。商業革命に対する評価は低い。イギリス一国型の資本主義の生成論。

## オランダ イギリスに先行する発展

- 1 貿易国家:イギリス重商主義が模範とする(模倣)
- 2 1602年、連合東インド会社(V.O.C)創設(イギリス東インド会社は1600年だが、有限責任の永続的な株式会社組織となるのは「クロムウェルの改組」1657年以降、それまでは一航海ごとの当座企業)、17世紀には支配的となる。
- 3 英蘭戦争1654-74 二つの海洋国家の経済戦争・商業戦争
- 4 1609年アムステルダム銀行(これはベネチアの銀行を模倣。預金を受け入れ、銀行券を発行。重商主義の時代に、貴金属の自由な輸出を認める政策をとりえた意味。貿易・産業から金融への「後退」。
- 5 イギリス重商主義は、オランダ重商主義の模倣、コピーとして展開された。しかし、コピーはキャッチアップではなく、新しいスタイルの重商主義を生むことになる。
- 6 羊毛工業から、綿工業へ。

## 資本主義の起源

- 1 「土地囲い込み」:『資本論』の「原始的蓄積」
- 2 「産業革命」:『資本論』の「機械と大工業」
- 3 「農業資本主義」
  - 1 MacNally,David, *Political Economy and the Rise of Capitalism*, 1988.
  - 2 Wood, Ellen Meiksins, *The Origin of Capitalism*, 1999. 平子友長ほか訳『資本主義の起源』2001.
  - 3 櫻井毅『資本主義の農業の起源と経済学』2009年。
- 4 単一起源説ではないが「商業革命」:「重商主義」の原義:商業的起源

## 起源の多義性

今日の新興国における製造業の雇用形態、経営様式を念頭において振り返ってみる必要がある問題



不連続性

- 1 羊毛工業から綿工業へという発展はない。
- 2 エンクロージャーで形成されたプロレタリアートが羊毛工業に吸収されたことはない（都市に流れ込んで雑業層を形成）
- 3 羊毛工業で機械制大工業のベースになる不熟練労働者が形成されたことはない。
- 4 羊毛工業の原料は基本的にイングランド内部で生産される。
- 5 綿工業の原料はすべて輸入。
- 6 綿工業は孤立した工場として立地。
- 7 綿工業も同質な単純労働（婦人・児童労働）だけの世界ではない。

生成・発展説批判

重商主義	生成期の資本主義	商人資本としてのイギリス羊毛工業
自由主義	成長期の資本主義	産業資本としてのイギリス綿工業
帝国主義	爛熟期の資本主義	金融資本の諸相（独・英・米）
第1次世界大戦後	新たな段階を画さず	「社会主義に対立する資本主義」

- 1 重商主義段階：生成 → 自由主義段階：発展 という連続的關係にはない。
- 2 イギリス国内で、羊毛工業の衰退と、綿工業の勃興があった。

多重起源説

